「ザ・レイクチャンプ」 The lake champ
ODL・トーク Outdoor Life Talk［整理番号：0129］

今回のテーマ　　『油断大敵集』考察
this time theme.　　It is considered the book Carelessness is our greatest enemy.

『油断大敵集』考察

千葉県四街道市に縁ある筆者が、江戸時代末期に現市域内で刊行された古典籍『油断大敵集』を架蔵するに至ったのも、数奇な運命であるらしく、感謝の念に堪えない。
木版刷りの和本故に、当時の発行部数が少なく、現存数も僅少と推定され、地元における知名度が低いようであり、その紹介と考察をした。
書物であるから「自序」と「本文」で著者の思いを紹介し、発行所にも触れた。
その過程で、『油断大敵集』に跋文を寄せた人物と跋文も、必然的に考察することになった。
他方、跋文を寄せた人物に関係する方々から見れば、『油断大敵集』に跋文が遺されている事実は、初耳で、晴天の霹靂ともいうべき慶事ではあるまいか。
巻末の「開板施金列名」は、寺関係者や一般市民がチェックすることで、先祖の新たな事実が見つかる可能性もあろう。
『油断大敵集』は、四街道市指定有形文化財にも相当し得る、貴重な郷土資料である。

目次
【01】これは何の本か
【02】著者はどんな人か
【03】発行所はどんな所か
【04】考察

【01】これは何の本か
【0101】書誌的仕様
【0102】内容

【0101】書誌的仕様
『油断大敵集』を千葉県内図書館横断検索（千葉県立図書館ホームページ・※01）で探すと、書誌情報は次のように表示される。

タイトルコード　1000000806083
書誌種別　図書（郷土）
書名　油断大敵集
書名ヨミ　ユダン タイテキシュウ
言語区分　日本語
著者名　卍應／〔著〕
著者名ヨミ　マンオウ
出版年月　1853(嘉永6)序
数量　44丁
大きさ　24cm
分類記号　188.84
件名　曹洞宗
注記　和装
注記　刊本

また筆者架蔵の『油断大敵集』で情報を補足すると、次の通りである。
著者：慈眼蘭若釋氏卍應撰
序：　嘉永六癸丑（1853）孟春
懺文：嘉永四辛亥（1851）臘八

跋:　嘉永壬子(1852)仲冬日
題簽:なし
柱題:なし
版元:下総国印旛郡山梨村　大隆禅寺　蔵板
注:和本3丁＋44丁＋4丁、替え表紙、並下

【0102】内容

一言で表せば、『油断大敵集』は宗教書(仏教)の範疇にあり、その記述は、和讃という形式である。
また、巻末部は戸口に分類される内容である。

原本にない目録を作り示せば、次の通りである。
序:　1丁表～3丁表
油断大敵集:　1丁表～33丁表
無常踊:　33丁裏～38丁表
効能書:　38丁裏～44丁表
懺文:　44丁裏
跋:　45丁表～45丁裏(丁付けなし)
開板施金列名:46丁表～48丁裏(丁付けなし)
奥付:　48丁裏(丁付けなし)

早速、『油断大敵集』自序(序一丁表～序三丁表)の、全文を紹介しよう。

「抑(そもそも)　小篠塚慈眼寺卍應和尚は　中越　泰栄禅師の嫡嗣にして長寿に従山以来
予が相識なり
其(その)　人となり　兎角(とかく)　世の塵談を厭(いと)ひ　常に教示一片の心　残存せらる
すなわち　童蒙(どうもう)も読み易(やす)く　解(げ)し易(やす)きがためとて　佛経祖録の
意をやわらげ　世■字国字(こくじ)等錯綜(さくそう)して　数篇述作(じゆつさく)せらるべし
中■就(つい)て　この油断大敵集ハ　尊(布つぽう)無常と因果の二常理(だうり)を
諭(さと)せしことのミ　夫(それ)人々浮々(うかうか)と油断をなしつるも
荒々しき死風(しふう)　時として吹(ふか)ざることなけれバ
憐むべき半死の白頭翁も　惜(おし)むべき紅顔(こうがん)の美少年(びせうねん)
も　図(はか)らず命(めい)を奪(うば)ハるゝハ　即(すなハち)大敵なり
如何(いか)なる豪傑(がうけつ)の智勇(ちゆう)も謀略(ぼうりやく)も　長者の七珍萬寳(志つちんまん
ぼう)も　この大難(だいなん)に克(かつ)ことなけれバ
諸人(しよにん)朝(あした)に常(みち)を聞(きい)て　夕(ゆふべ)に死(し)すとも
可なりと　孔子(こうし)の宣(のた母)へしことを慮(おもんバか)り　急(いそ)いてこの集(志ふ)
を　无(もみ)し　無常(むじやう)の理(ことハ)りを　明(あきら)むべきなり
又(また)我(わが)大聖世尊(だいしやうせそん)の説(とき)給ふが如(ごと)く　善因(ぜんいん)ハ善果
(ぜんくわ)悪因(あくいん)ハ悪果(あくくわ)となること明鏡(めいきやう)に
物體(もつたい)の現(げん)ずるに等(ひとし)く　美醜方園(びしうほうゑん)大小一毛(だいせう
いちまう)の私(わたくし)なし
故(ゆへ)に天照大神(てんせうだいじん)ハ宝鏡(ほうきよう)を以(もつ)て　明(あきらか)に
照(てら)し正直(しやうじき)を賞(しよう)して　邪曲(じやきよく)を罰(ばつ)し給ふこと誰(だれ)
可(か)免(まぬが)るべけん哉(や)
思(おもふ)にこの篇(へん)ハ餘書(よしよ)に異(ことな)り面白(おも志ろ)く
巧(たく)まれけれバ　見ることを楽(ねが)ふことの
猶(なを)臭穢(しうゑ)に蝿(はひ)の附(つく)が如(ごと)くならん
見ることの多(お保)けれバ　見聞(みんもん)の五益(こやく)世(よ)の助(たす)けとなることも
亦(また)鮮(すくな)かるべからず
この頃聞(きく)に写(うつ)し去(さ)る族(やから)　頗(すこぶる)夥(お保)しと
左(さ)れども写本にてハ　四海(しかい)に行(をこな)われがたく　且(かつ)鳥焉(うゑん)が
馬(バ)となり　魚魯(ぎよろ)誤(あやま)ること多(お保)けれバ　幻(すなハち)亳釐(がうり)の
差(たが)ひ　天地(てんち)怨誘(江んがく)す
是(さて)を以(もつ)て　不肖(ふせう)者回(このたび)発起(ほつき)して　梓(あづさ)に上(のぼ)せ
永世(ゑいせい)広く天下に流布(るふ)せしむ
苟(いやしく)もこの書(しよ)を見(ミ)バ三(ミつ)の益(えき)あらん
謂(いわ)く　用字(ようじ)を知り　事理(じり)を辨(わきま)へ　佛果(ぶつくわ)に
到(いた)る　然(され)バ　隨喜(すいき)の功徳(くどく)
聊(いささか)四恩三有(しおんさんう)に回向(ゑかう)するものなり

嘉永六癸丑孟春吉旦
下総国印旛郡山梨
大隆禅寺無能大珍叟　釋氏無能黒印　大珍之印黒印」

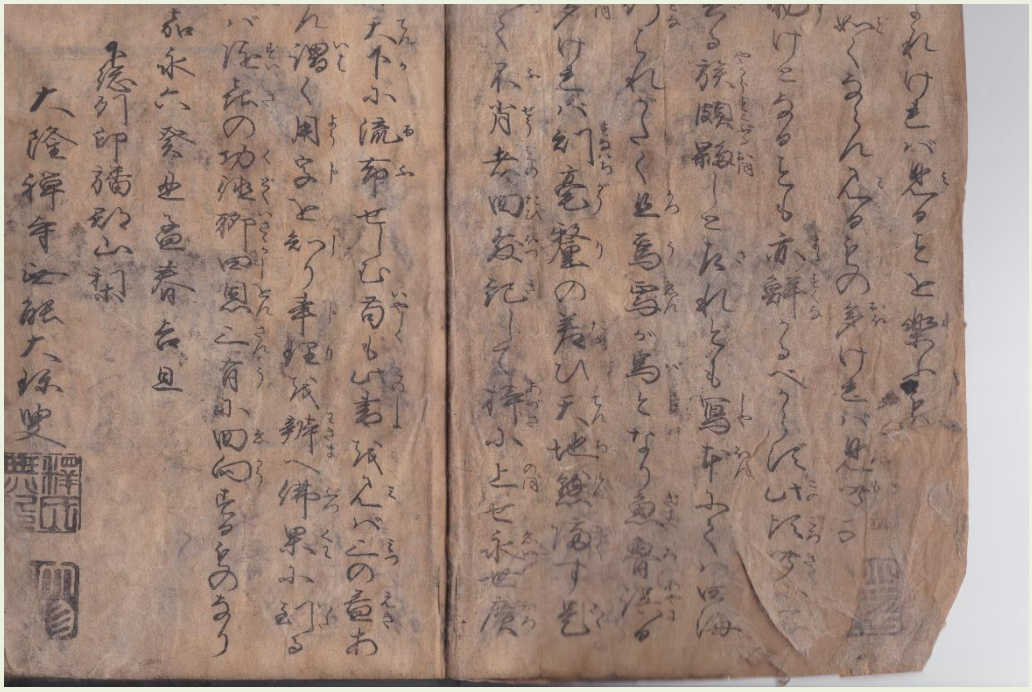

図01（fig.01）自序

「抑（そもそも） 小篠塚慈眼寺卍應和尚は 中越 泰栄禅師の嫡嗣にして長寿に従山以来
予が相識（しようしき）なり
其（その） 人となり 兎角（とかく） 世の塵談（じんだん）を厭（いと）ひ 常に教示一片の心 残存せらる
乃（すなハち） 童蒙（どうもう）も読み易（やす）く 解（げ）し易（やす）きがためとて 佛経祖録能（の）
意を和（やハ）らげ 世■字国字（こくじ）等錯綜（さくそう）し天（て） 数篇述作（じゆつさく）せらるべし
中■就（つい）て この油断大敵集ハ尊（布つぽう）無常と因果（いんぐわ）能（の）二（尓）常理（だうり）を
諭（さと）せしことのミ 夫（そ連）人々浮々（うかうか）と油断をなしつるも
荒々しき死風（しふう） 時として吹（ふか）ざることなけ連（れ）バ
憐（あハ連）むべき半死の白頭翁（はくとうをう）も 惜（おし）むべき紅顔（こうがん）の美少年（びせうねん）
も 図（はか）ら須（ず）命（めい）越（を）奪（うば）ハるゝハ 即（すなハち）大敵なり
如何（いか）なる豪傑（がうけつ）の智勇（ちゆう）も謀略（ぼうりやく）も 長者の七珍萬寶（志つちんまん
ぼう）も この大難（だいなん）尓（に）克（かつ）ことなけ連（れ）バ
諸人（しよにん）朝（あした）尓（に）常（みち）を聞（きい）て 夕（ゆふべ）尓（に）死（し）春（す）とも
可なりと 孔子（こうし）能（の）宣（のた母）へしことを慮（おもんバか）り 急（いそ）いてこの集（志ふ）
越（を） 无（もみ）し 無常（むじやう）の理（ことハ）り越（を） 明（あきら）むべきなり
又（また）我（わが）大聖世尊（だいしやうせそん）の説（とき）給ふが如（ごと）く 善因（ぜんいん）ハ善果
（ぜんくわ）悪因（あくいん）ハ悪果（あくくわ）となること明鏡（めいきやう）尓（に）
物體（もつたい）の現（げん）春（ず）る尓（に）等（ひとし）く 美醜方園（びしうほうゑん）大小一毛（だいせう
いちまう）の私（わたくし）なし
故（ゆへ）尓（に）天照大神（てんせうだいじん）ハ宝鏡（ほうきよう）を以（もつ）て 明（あきらか）尓（に）
照（てら）し正直（しやうじき）を賞（しよう）して 邪曲（じやきよく）越（を）罰（ばつ）し給ふこと誰（た連）
可（か）免（まぬが）るべけん哉（や）
思（おもふ）尓（に）この篇（へん）ハ餘書（よしよ）尓（に）異（ことな）り面白（おも志ろ）く
巧（たく）まれけ連（れ）バ 見ることを楽（ねが）ふことの
猶（なを）臭穢（しうゑ）尓（に）蝿（はひ）の附（つく）が如（ごと）くならん
見ることの多（お保）け連（れ）バ 見聞（みんもん）の五益（こやく）世（よ）の助（たす）けとなることも
亦（また）鮮（春（す）くな）かるべから須（ず）
この頃聞（きく）尓（に）写（うつ）し去（さ）る族（やから） 頗（春（す）こぶる）夥（お保）しと
左（さ）れども写本尓（に）てハ 四海（しかい）尓（に）行（をこな）われがたく 且（かつ）鳥焉（うゑん）が
馬（バ）となり 魚魯（ぎよろ）誤（あやま）ること多（お保）け連（れ）バ 幻（春（す）なハち）毫釐（がうり）の
差（たが）ひ 天地（てんち）怨誘（江んがく）す
是（さて）を以（もつ）て 不肖（ふせう）者回（このたび）発起（ほつき）して 梓（あづさ）尓（に）上（のぼ）せ

永世（ゑいせい）広く天下尓（に）流布（るふ）せしむ
苟（いやしく）もこの書（しよ）越（を）見（ミ）バ三（ミつ）の益（えき）あらん
謂（い者（は））く　用字（ようじ）を知り　事理（じり）越（を）辨（王（わ）きま）へ　佛果（ぶつく王（わ））尓（に）
到（いた）る　然（さ連（れ））バ　隨喜（春（す）いき）の功徳（くどく）
聊（いささか）四恩三有（しおんさんう）尓（に）回向（ゑかう）春（す）るものなり
　嘉永六癸丑孟春吉旦
　下総国印旛郡山梨
　大隆禅寺無能大珍叟　釋氏無能黒印　大珍之印黒印」

『油断大敵集』の序文は、ここに紹介した自序のみで、他者からの序文はない。
自序の初めに、卍應和尚の出自と経歴、並びに予（序文の署名者・無能大珍叟）との関係を述べている。
次いで、『油断大敵集』著述の決意と表現の工夫や、読者の得る利点（現今言うところの、本書の特色）を
挙げている。
中でも、郷土史研究者・古文書解読者諸兄が「我が意を得たりと膝を打つ」件（くだり）は、
写本（の毛筆くずし字）では「鳥焉が馬となり魚魯誤ること多」しの付近であろう。

次に、『油断大敵集』の本文の一部を、書き下し文で紹介しよう。

「下の下ハ謀反（むほん）や出入向（でいりむき）
下の中喧嘩や意趨遺恨　下の上善悪世の噂
中の下　貧福（ひんぷく）欲ばなし　中ゝ腰より下（しも）がら里
中上無用の雑言よ　上の下萬（よろづ）の芸ばなし
上中発句（ほつく）俳諧や　歌や連歌（れんが）や詩文章（しぶんしやう）
読書（よみかき）互（たがひ）の後生（ごしやう）より
因縁無常因果の理（り）
上ゝ悟（さと）りの一大事　是迄（これまで）件（くだん）の値段（ねだん）附（づ）け
夫（それ）より上（のぼ）れバ死猫児（しめうに）の
頭（あたま）で価（あたひ）も窺（うかが）ひも
膂年（ろねん）尓至るも後（あと）つかぬ　佛祖向上無礙（むげ）無二で
浄名（じやうみやう）大士の如（ごと）くなる
一黙怒雷（いちもくどらい）の大話（おほばな）し
森羅萬象（しんらばんざう）皆（みな）語（かた）る
形態（なりふり）無骨（ぶこつ）で醜（みにく）きも
心の清き人ならバ　木綿の財布に金玉貨（きんぎよくか）
泥（どろ）に生（しやう）ずる蓮華（れんげ）なり」（十三丁裏～十四丁裏）。

「死軍（しぐん）後（うしろ）に陣（ぢん）を張る
草葉の露の命にて　此集（このしふ）書内（かくうち）死ぬるかハ
知れぬ生死（しやうじ）の影なれバ
廓如（くわらり）と襖（ふすま）を明開（あけひら）き
世間の事を推量（をしはか）り
とほけなくも示します　良薬口に苦（にが）けれど
瞑眩（めんげん）するも構（かま）ハずに
飲（のめ）バ病気（びやうき）が平癒して」（十八丁裏）と民に教える。

「人たる道とハ仁が本（もと）　人の仁とハ慈悲が本（もと）
儒家で仁と名（なづ）けしを　佛家（ぶっけ）で慈悲といふおかし
釈迦ハ三世を並べ説き　孔子ハ一世を単に説く
三世ハ一世の影形（かげかたち）」（廿三丁表）。

「神佛固（もと）より一致之　聖武皇帝の御叡慮と　大神宮の御神慮で
奈良東大寺大伽藍　大佛建立なりし事　深く考へ信ず遍（べ）し」（三十一丁裏）。

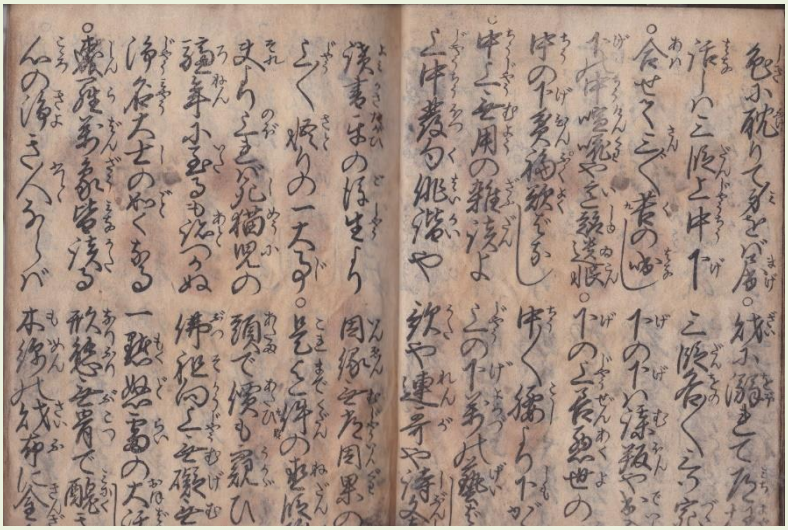

図02（fig.02）本文の一部

「下の下ハ謀反（むほん）や出入向（でいりむき）
下の中喧嘩や意趨遺恨　下の上善悪世の噂
中の下　貧福（ひんぷく）欲ばなし　中ゝ腰より下（しも）がら里
中上無用の雑言よ　上の下萬（よろづ）の芸ばなし
上中発句（ほつく）俳諧や　歌や連歌（れんが）や詩文章（しぶんしやう）
読書（よみかき）互（たがひ）の後生（ごしやう）より
因縁無常因果の理（り）
上ゝ悟（さと）りの一大事　是迄（これまで）件（くだん）の値段（ねだん）附（づ）け
夫（それ）より上（のぼ）連（れ）バ死猫児（しめう尓）の
頭（あたま）で価（あたひ）も窺（うかが）ひも
膂年（ろねん）尓至るも後（あと）つかぬ　佛祖向上無礙（むげ）無二で
浄名（じやうみやう）大士の如（ごと）くなる
一黙怒雷（いちもくどらい）の大話（おほばな）し
森羅萬象（しんらばんざう）皆（みな）語（かた）る
形態（なりふり）無骨（ぶこつ）で醜（み尓く）きも
心の清き人ならバ　木綿の財布に金玉貨（きんぎよくか）
泥（どろ）尓（に）生（しやう）ずる蓮華（れんげ）なり」（十三丁裏～十四丁裏）。

「死軍（しぐん）後（うしろ）尓（に）陣（ぢん）越（を）張る
草葉能（の）露の命尓（に）て　此集（このしふ）書内（かくうち）死ぬるかハ
知（し）連（れ）ぬ生死（しやうじ）の影な連（れ）バ
廓如（くわらり）と襖（ふすま）越（を）明開（あけひら）起（き）
世間能（の）事越（を）推量（をしはか）り
とほけなくも示します　良薬口尓（に）苦（にが）け連（れ）ど
瞑眩（めんげん）春（す）るも構（かま）ハずに
飲（のめ）バ病気（びやうき）が平癒（ゆ）し天（て）」（十八丁裏）と民に教える。

「人たる道とハ仁が本（もと）　人の仁とハ慈悲が本（もと）
儒家で仁と名（なづ）けし越（を）　佛家（ぶっけ）で慈悲といふおかし
釈迦ハ三世越（を）並べ説き　孔子ハ一世越（を）単に説く
三世ハ一世の影形（かげかたち）」（廿三丁表）。

「神佛固（もと）より一致之　聖武皇帝能（の）御叡慮と　大神宮の御神慮で
奈良東大寺大伽藍　大佛建立なりし事　深く考へ信ず遍（べ）し」（三十一丁裏）。

本文は、無能大珍和尚が村人に、生活や行動の規範を簡易に説いたものである。
人が上を目指せるよう、上智と下愚を説き、泥中の蓮華を説いた（十三丁裏～十四丁裏）。
論語から孔子を挙げ（廿三丁表）、神佛一致を説いた（三十一丁裏・1868明治元年神佛判然令以前の教え）。

【02】著者はどんな人か

千葉県立中央図書館は、「著者名・卍應」としている。
財団法人成田山仏教図書館の『油断大敵集』書誌は、「著者名・卍応 | 大珍編」とする。
『四街道町史　社寺史』(※02)に、「山梨の大隆寺(曹洞宗)の住職一覧」があり(70-71pp)、
その十九世に「無能大珍大和尚、1859(安政06)年11月04日歿」と見え、説明欄に「前住の事業完成、著書あり、佐原の武士」とある。

『油断大敵集』自序(序一丁表)では、
「抑(そもそも)　小篠塚慈眼寺卍應和尚は　中越　泰栄禅師の嫡嗣にして長寿に従山以来　予が相識なり
其(その)　人となり　兎角　世の塵談を厭ひ　常に教示一片の心　残存せらる
乃(すなわち)　童蒙も読み易く　解し易きがためとて　佛経祖録能(の)
意を和らげ　世■字国字等錯綜し天(て)　数篇述作せらるべし(以下略)」とあり、
署名は「大隆禅寺無能大珍叟」としている(序三丁表)。

また、跋文(後述)は「禅友應沙　一日　此篇ヲ懐ニシテ来テ　予ニ告テ曰ク(以下略)」(四十四丁の次丁表・丁付けなし)と始まり、文末の署名は「嘉永壬子仲冬日　全後学沙門京璨我　跋」(四十四丁の次丁裏・丁付けなし)である。

これらを総合し、編著者卍応(号・まんおう)は、新潟県中越地方の泰栄禅師の子で、先ず小篠塚(現・千葉県佐倉市小篠塚)慈眼寺住持となり、その後大隆寺十九世住持になったものと考えられる。
ただ、自序では、卍應和尚について、予(序文の署名者・無能大珍叟)が述べる形式になっており、
卍應和尚と無能大珍叟は別人と考える方もおられようが、禅の世界では一人二役(一無位真人・後述)に違和感はなく、むしろ普通にも思われる。
従って、自序は、今の自分が昔の若かりし自分を他人称で紹介したもの、という程である。
ちなみに、禅友應沙の應は卍應個人を特定し、沙は仏教用語で出家(修行者・僧)を意味する沙門を表わすととれる。
しかし、「佐原の武士説の根拠」「泰栄禅師の人物像詳細」は、今後の調査課題に残る。

【03】発行所はどんな所か

出版となれば古くは京都が独占状態であったが、1603(慶長8)年以降は次第に江戸表の有名版元(出版社)を起用する事例が多くなり、江戸時代末期には江戸表における出版が盛況になると共に、地方小出版も増えてきた。
筆者架蔵の同時代本を見渡すと、
千鍾房玉山堂(江戸・1818(文化戊寅15)年『草木育種』刊)、
呑海樓(東都・1831(天保辛卯2)年『魚鑑』刊)、
山城屋佐兵衛他(東都・1836(天保丙申7)年『増補　飲膳適要』刊)、
備中屋傳蔵(江都・1848(嘉永戊申元)年『掌中名物類編』刊)、
青雲堂(江戸下谷・1861(文久辛酉元)年『事物異名類編』刊)
慶應義塾(東京・1868(明治元)年『天変地異』刊)等の木版和本が散見される。
1853(嘉永6)年序の『油断大敵集』は、江戸から遠く離れた片田舎の、下総国印旛郡山梨村の曹洞宗大隆禅寺を版元とする、昨今いうところの私家版(自費出版)である。

『油断大敵集』とほぼ同時期の1845(弘化2)年に成立(自序)しながら、刊本の初版発行は、60年後の1905(明治38)年、著者没後となった『下総国旧事考』(清宮秀堅著)(※03)は、時代の大変化もあり、著者の地元千葉県佐原で印刷(正文堂)・発行されている。
その『下総国旧事考』に国学者清宮秀堅が記載した大隆寺は以下のようだ。
「大隆寺。
山梨村ニ在リ。旧南波佐間村ニ在リ。大永七年今ノ地ニ移ル。
創建詳ナラズ。僧賢室闇芳開ク所ナリ。土室祥鳳院ニ隷ス。
寺領十石。天天(天正か)十九年辛卯十一月付。〇地物井村ニ在リ。
右三寺。曹洞宗。寺領合四十石」(第7本,巻13,神社寺院,十九丁表)。

図03（fig.03）大隆寺

大隆寺について最近の著述では、1979（昭和54）年刊『四街道町史　社寺史』（栗原東洋著）に詳しい。
また、2014（平成26）年の「四街道市の中世編（2）二人の千葉勝胤について」（樋口誠太郎著,『四街道の歴史』第9号,32-33pp）（※04）でコンパクトに述べられている。
本稿では、原氏について、および大隆寺の末寺について、並びに親寺について簡単に触れておく。
『四街道町史　社寺史』の該当箇所は、以下のように読める。
「1573（天正3）年、臼井（現・千葉県佐倉市臼井）城主原胤栄が、小弓（現・千葉県千葉市中央区生実）から、曹洞宗時報山宗徳寺を臼井に引寺し、山号を改め長谷山宗徳寺とした。
長谷山宗徳寺の末に、宗胤寺（現・千葉県千葉市中央区弁天町）、風光山福寿院（現・同県千葉市中央区川戸町）他がある。」（51-52pp）。
ただし、時報山宗徳寺は、報恩山宗徳寺の誤まりである（『佐倉市史』巻一　212pp,『四街道の歴史』第9号,45pp）（※05）。
大隆寺開基は、臼井城主原氏の采女または正室の説があり（『四街道の歴史』第9号,32-33pp）、臼井・原氏菩提寺の宗徳寺とならんで、大隆寺も臼井城主原氏ゆかりの寺と云える。
大隆寺5世祖龍和尚は、1601（慶長6）年慈眼寺（旧根郷村小篠塚）を創立、1624（寛永元）年東泉寺（旧根郷村太田）を創立とされる（『四街道町史　社寺史』57pp）。
さらに、大隆寺の親寺、祥鳳院を『成田市史　中世・近世編』（※06）に探る。
「祥鳳院　土室にあり、本尊は釈迦如来で、寛平年間（889～898）平良将の創建と伝えられる。密岩上人を開山とし、もとは真言宗であったが、明応七年（1498）に香取郡助崎城主大須賀信濃守が堂宇を再建したとき、明堂盛哲を招き曹洞宗に改宗したという。」（257pp）。
「曹洞宗の寺院は10か寺で、なかでも古刹は土室村の祥鳳院である。山号を竹県山と号し（中略）。
天正19年11月徳川家康より10石の寺領を賜り、朱印状の格式をもつ寺院となった。」（791pp）。

『油断大敵集』発行所の鷲棲山大隆寺（じゅせいざんだいりゅうじ）は禅の一派、曹洞宗通幻派（つうげんは）の寺院である。
出版時の所在地は、下総国印旛郡山梨村（現・千葉県四街道市山梨）と表記され、大隆寺は現存している。
前述のように、小篠塚慈眼寺は、大隆寺の末寺で、今も大隆寺の縁者が住職を務める。
一見すると、大隆寺（四街道市）と慈眼寺（佐倉市）の市域は相違するが、地形的には印旛沼に注ぐ鹿島川を挟んで、大隆寺は南西側、慈眼寺は北東側にあり、両寺の直線距離は3．5Kmに過ぎない。

【04】考察
【0401】『油断大敵集』跋文
【0402】大中京璨和尚略伝
【0403】「開板施金列名」

【0401】『油断大敵集』跋文
『油断大敵集』跋文（全文）の書き下し文を紹介しよう。
「禅友應沙　一日　此篇ヲ懐ニシテ来テ　予ニ告テ曰ク
村庵無事　常ニ蒲葉ニ写メ安紙トシテ　餘（ヨ）晦（クラシ）露言ヲ綴テ風劫（オビヤカ）ス
　欽留（ツツシミトドメ）写ス者多シ　故ニ或ル人上木ヲ動（ウゴケシ）ム
然リ為メ　侍観え災　無キコト能（アタ）ハ不（ズ）
之ヲ仍（ジョウ）シめ　予條ニ倍（マス）ミ　随喜メ為曰ク

著（アラワス）哉（カ）ナ　我レ聞ク麁言細語（ソゲンサイゴ）皆（ミ）ナ第一義ニ帰（キ）ス
一善ハ則（スナワ）チ無義　無義ハ則（スナワ）チ一（イチ）無（ナ）シ位（イ）セ尓（ニ）ル以（モツテ）
故（ユエ）ニ上智ハ　才（サイ）不待（マタ）ヌ者ナリ
外（ソト）ヲ難化（ナンケ）ハ　本下愚　佛祖ノ出世　唯（タダ）ニ迷情ヲ救フ善（ヨ）シ
夫（ソ）レ樵夫（ショウフ）漁妻此言ヲ聞（キキ）テ留（トド）メ漱（ス ス）グ
旄（ボウ）シ悪因ヲ遠ク　心セハ善業ニ得ル
則（スナワ）チ終（ツイ）ニ覚果ヲ訴（ソ）シテ何ノ疑（ウタガ）ヒ
平（タイラ）己（コ）レ　進陟（シンチョク）　夫（ソ）レみヲ　急（イソ）ケ

嘉永壬子仲冬日　全後学沙門京璨我　跋　」
（四十四丁の次丁表～四十四丁の次丁裏・丁付けなし）

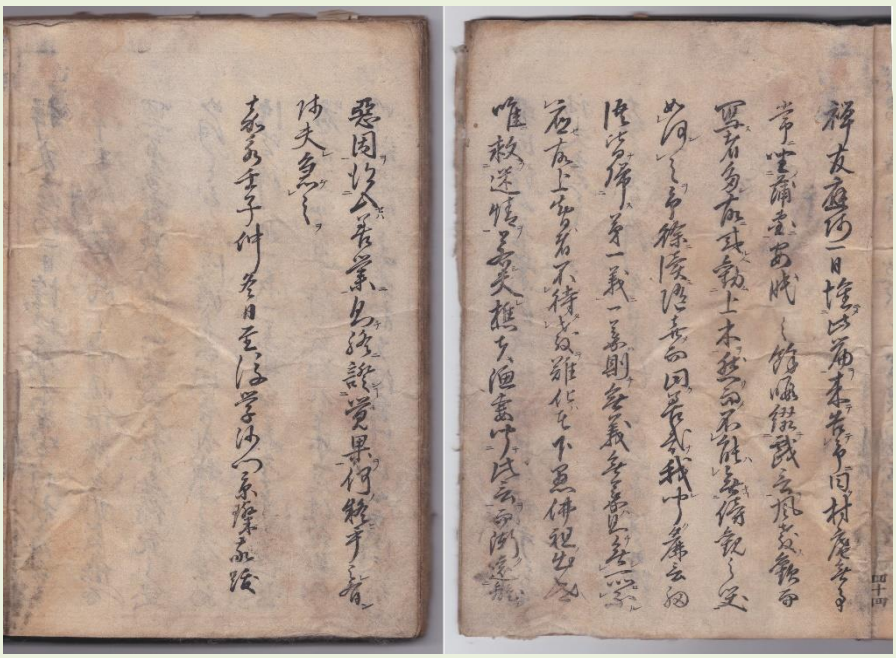

図04（fig.04）跋文

跋文の署名「京璨」は、大中京璨和尚を示す。
初めは、禅友應沙（無能大珍和尚・卍応）が、予（大中京璨和尚・退歩）に語ったことの紹介である。
大隆寺で、蒲葉（を組んで乾燥させた紙）のようなものに、自分は定期的に格言を書き、門前に掲げています。
それを書き写す村人も多く、ある人は庭園の植え込みの上層部を損壊し、寺の景観に支障がないとは言えません。
さて、跋文の中程から、予（大中京璨和尚・退歩）の言葉が始まる。
『油断大敵集』の記述は、粗筋の箇所・精密な箇所共に、全てお釈迦さまの声である（麁言細語皆帰第一義）。
中国・北宋代に道原により編纂された禅宗を代表する燈史『景徳傳燈録』（けいとくでんとうろく・景徳伝灯録）及び、『祖堂集』巻第八（※07）　に「
道志問う、麁言及び細語、皆な第一義に帰す。如何なるか是れ第一義。
師（欽山和尚）云く、汝は是れ仏家の奴なり、是れなりや。」（250pp）と出ること等を踏まえたものであろう。
もう一人の自分は、いつでもどこでも自分の中にいる（臨済禅師・臨済録の一無位真人・※08）を踏まえ、平常心で暮らす主人公（※09）を説く（この平常心が文末に掛かる）。

先に紹介した本文十三丁裏～十四丁裏の話に呼応して、『論語』の「陽貨」（※10）から、「上知(じょうち)と下愚(かぐ)とは移らず」を引き、信心を持たぬ者を新規に宗教へ勧誘すること（難化）は困難と云い、また、御釈迦様の出生が世を救うと云う。
大衆は『油断大敵集』の言葉を記憶し、心を洗いなさい。

そうすれば、と紀元前403年～959年までの1362年間を記した歴史書、司馬光（しばこう）の『資治通鑑』（しじつがん）「巻二十三　漢紀十五」（※11）から、始元六年（庚子，公元前八一年）の2項中の、「節旄盡落」を引いてヤクの尾を飾り付けた旗竿（旄）を持った中国・前漢代の蘇武（そぶ・紀元前140年ころ～紀元前60年）の如く、悪因は遠ざかり、良い結果を得るであろう。

（以下に2項全文を白文で示す）
「初，蘇武既徙北海上，稟食不至，掘野鼠、去草實而食之。杖漢節牧羊，臥起操持，節旄盡落。
武在漢，與李陵俱為侍中；陵降匈奴，不敢求武。久之，單于使陵至海上，為武置酒設樂，
因謂武曰：「單于聞陵與子卿素厚，故使來說足下，虛心欲相待，終不得歸漢，空自苦；亡人之地，
信義安所見乎！足下兄弟二人，前皆坐事自殺；來時，太夫人已不幸；子卿婦年少，聞已更嫁矣；
獨有女弟二人、兩女、一男，今復十餘年，存亡不可知。人生如朝露，何久自苦如此！陵始降時，
忽忽如狂，自痛負漢，加以老母系保宮。子卿不欲降，何以過陵！且陛下春秋高，法令無常，
大臣無罪夷滅者數十家。安危不可知，子卿尚復誰為乎！」
武曰：「武父子無功德，皆為陛下所成就，位列將，爵通侯，兄弟親近，常願肝腦塗地。今得殺身自效，
雖斧鉞、湯鑊，誠甘樂之！臣事君，猶子事父也。子為父死，無所恨。願勿復再言！」
陵與武飲數日，復曰：「子卿壹聽陵言！」
武曰：「自分已死久矣，王必欲降武，請畢今日之歡，效死於前！」陵見其至誠，
喟然歎曰：「嗟乎，義士！陵與衛律之罪上通於天！」因泣下沾衿，與武決去。賜武牛羊數十頭。

後陵復至北海上，語武以武帝崩。武南鄉號哭歐血，旦夕臨，數月。及壺衍鞮單于立，母閼氏不正，
國內乖離，常恐漢兵襲之，於是衛律為單于謀，與漢和親。漢使至，求蘇武等，匈奴詭言武死。
後漢使復至匈奴，常惠私見漢使，教使者謂單于，言：「天子射上林中，得雁，足有系帛書，
言武等在某澤中。」使者大喜，如惠語以讓單于。
單于視左右而驚，謝漢使曰：「武等實在。」乃歸武及馬宏等。馬宏者，前副光祿大夫王忠使西國，
為匈奴所遮；忠戰死，馬宏生得，亦不肯降。故匈奴歸此二人，欲以通善意。
於是李陵置酒賀武曰：「今足下還歸，揚名於匈奴，功顯於漢室，雖古竹帛所載，丹青所畫，
何以過子卿！陵雖駑怯，令漢貰陵罪，全其老母，使得奮大辱之積志，庶幾乎曹柯之盟，
此陵宿昔之所不忘也。收族陵家，為世大戮，陵尚復何顧乎！已矣，令子卿知吾心耳！」
陵泣下數行，因與武決。
單于召會武官屬，前已降及物故，凡隨武還者九人。既至京師，詔武奉一太牢謁武帝園廟，
拜為典屬國，秩中二千石，賜錢二百萬，公田二頃，宅一區。
武留匈奴凡十九歲，始以強壯出，及還，鬚髮盡白。
霍光、上官桀與李陵素善，遣陵故人隴西任立政等三人俱至匈奴招之。
陵曰：「歸易耳，丈夫不能再辱！」遂死於匈奴。」

在家は、平常心で暮らす日常こそが、修行であり、修行が証（さと）りだ（修証一如・※12）。
さあ急げ。

現代も、出版時の慣例として、著者の師匠・教授格、あるいは所属組織長・業界団体長等に、
自著への序文・跋文を依頼し掲載する事例は多く見られる。
ところが、『油断大敵集』の著者無能大珍和尚は、大隆寺の親寺祥鳳院でもなく、さりとて宗門の総本山で
もない印旛郡内の昌福寺大中京璨和尚に跋文を依頼している。
また、署名は通常なら「昌福寺沙門京璨我」となるべきところ、『油断大敵集』では特定の一寺名を用いず
に「全後学沙門京璨我」となっている。
これらから、後述する1840（天保11）年「論破」の12年後にあって尚、大中京璨和尚の名が響き渡り、
親寺はもちろんのこと、総本山からも一目置かれる存在であったことが窺い知れる。
『祖堂集』『景徳傳燈録』は僧籍として当然のことかも知れぬが、臨済録をはじめ、中国古典の
『論語』『資治通鑑』を踏まえた跋文から、大中京璨和尚の「学」「知」「烈」及び「優」が感じられる。

図05（fig.05）昌福寺　全景

曹洞宗鷲棲山大隆寺（現・千葉県四街道市）十九世無能大珍和尚が草稿を携え、片道約25Km（直線距離）の冬の道を歩いて（又は駕籠に乗り、あるいは曳き馬に乗り）、曹洞宗稲荷山昌福寺（現・千葉県富里市）に、一世を風靡し高名なる二十一世大中京璨和尚を訪ね、跋文を依頼した時期は、懺文完成の後、すなわち嘉永四辛亥（1851）臘八（禅用語：12月01日～08日の臘八摂心・ろうはつせっしん）の直後の師走と推定される。
対し、大中京璨和尚は翌1852年02月（嘉永壬子仲冬日）跋を与えている。
しかも、思いもよらぬ田舎坊主の著書への跋文依頼に、大層喜んだ節が跋文の「著哉ナ」に見て摂れる。
この時、大中京璨和尚46才であり、以降、1871（明治04）年10月14日65才で寂すまで、少なくとも20年間は昌福寺住持であった。

【0402】大中京璨和尚略伝

大中京璨（だいちゅうきょうさん）和尚は、1806（文化3）年生まれ。
1816（文化13）年、10才にして京都宇治・曹洞宗仏徳山興聖寺（ぶっとくさんこうしょうじ）で、
回天（23才）、物外（22才）らと共に、二十六世関浪麿甎（かんろうません・1765～1838年歿）和尚に侍し、法を嗣いだ。
興聖寺は、道元禅師初開の禅道場として知られる。

回天慧杲（かいてんえこう）和尚は、1794（寛政6）年生まれ（※13）。
興聖寺二十六世関浪麿甎和尚の法嗣。
1842（天保13）年より12年間、興聖寺二十八世として住し僧堂も隆盛を極めた。
回天慧杲和尚の法嗣に、永平寺の環渓密雲和尚、豪徳寺の白堂雪巌和尚等がいる。
1853（嘉永6）年60才で寂す。

物外不遷（もつがいふせん）和尚は、1795（寛政7）年伊予の生まれ（※14）。
1816（文化13）年22才から、1819（文政2）年25才に至る3年間、
興聖寺で参禅工夫、悟得する。
1822（文政5）年28才の時、広島伝福寺観光和尚のもとに帰り、嗣法。
1828（文政11）年34才の春、備後尾道済法寺九世住持となる。
怪力で不遷流柔術の開祖、拳骨和尚・武田物外とも。
1867（慶応3）年73才で寂す。

さて、大中京璨和尚である。

やや長くなるが『坦山和尚全集』（※15）から引用しよう。
「坦山老師も此処に出かけて行った、其頃栴檀林の学寮は幾つにも分れて本山寮越後寮加賀寮佐渡寮薩摩寮肥後寮と云ふ風て有つたか其中越後寮の寮司か京燦と云ふ和尚て是か非常の豪傑て、私も親灸したことかありますか、此両人は年は大層な相違か有た
京燦は漢学と云ふ側の力は無い、専門の禅学と云ふ側から力を得た人たから、坦山師の若い元気で之に当たか、到頭及はなかつた、
或日例の大議論か起つた、其最初の約束か面白い、
其議論のことに就ては今は到底御話する遑は無いが、随分八釜敷い議論で議論の前に若し御前か負けたら拙僧の弟子になれ、拙僧が負けたら御前の弟子にならうと云ふ約束を結んで議論をオツ始めた、
拙者か若し負けたら坊主になつて弟子にならう、若し貴僧か負けたら、環俗して私の弟子に御なりなさい、と云ふ約束をして、議論を始めた所か、坦山老師は中々及はなかつた、
其で遂に京燦の為に服せられて一言も出なくなつたので、約束通り坊主に成つた、
始めは佛法抔と云ふものは聞いたことは無く、少しも取るに足らぬものと思つて居られたが、玆に至つて佛法は中々大丈夫の学問てある、本当の男らしい男て無ければ学ふことか出来ないと云ふことを知つたと云はれた、
其故碑文を書いた中にも初めて佛法の大丈夫の学たるを知ると云ふ坦山和尚の語を其儘書て置た、
然るに京燦和尚は貴下か約束通り僧侶になると云ふことは誠に結構なことである、併し乍ら私の直接弟子にすると云ふことは出来ない、
私の師匠か浅草橋場の総泉寺に英仙と云ふて、住職して居らるゝから、其弟子になつて私の弟分となつてくれと云ふて、師匠の得度を受けさして、始めて坊さんになつた（後略）」

栴檀林（せんだんりん）は、駒込の曹洞宗諏訪山吉祥寺（すわさんきちじょうじ）にあった学寮（後の駒沢大学）で、幕府の学問所「昌平黌」と比肩される当時の学僧の最高学府である。
坦山和尚は、1819（文政2）年磐城の平生まれ、原坦山（はらたんざん）、本名新井良作（※18）。

曹洞宗大宮山東光寺（埼玉県さいたま市・おおみやさんとうこうじ）の由緒沿革（※16）に
「28世大中京璨大和尚は、駒込吉祥寺にある栴檀林（江戸期の宗門僧侶の最高学府）の佐土寮寮主を勤めた学僧で、法嗣に原坦山大和尚がいた。」とある。
続いて「ただし、議論に負けた者が勝者の弟子となることを約束しての議論で、数日後、ついに坦山大和尚は降伏した。そのため、天保11年（1840）、剃髪式が東光寺において行われた。」
とあり、この議論で原坦山和尚が大中京璨和尚に論破された年は、1840（天保11）年と推定される（※18）。
時に大中京璨和尚34才、原坦山和尚21才であった。
ただ、東光寺由緒沿革中の「佐土寮寮主を勤めた学僧」については、前出『坦山和尚全集』の云う
「越後寮の寮司か京燦と云ふ和尚て」と相違する。
その後、原坦山和尚は、興聖寺二十八世回天慧杲和尚（前述）に参じ、風外本高（ふうがいほんこう・1779～1847年歿）和尚に参じ、大中京璨和尚の法を嗣いだ。
また、「東京大学インド哲学仏教学研究室の沿革」（※17）に、
「明治12年（1879）9月18日の学科課程改正において、「別ニ仏書講義ノ一課目ヲ置キ文学部各級生徒ヲシテ随意聴講セシム」とされ、同年11月25日原坦山（1819～1892）が、法理文学部綜理加藤弘之の依頼をうけて、和漢文学科の講師として仏教典籍の講義を担当したのが本学科の源流である。」と見える。
1879（明治12）年は、原坦山和尚60才の時である。
原坦山和尚の紆余曲折の生涯は、木村清孝東京大学教授の論考（※18）に詳しい。

図06（fig.06）昌福寺　山門扁額（安処林）

さて再び、大中京璨和尚である。
栴檀林で原坦山和尚を論破した1840（天保11）年の後、上述した東光寺の二十八世住持となる。
『心にとどく禅のはなし』（※19）から、東光寺における大中京璨和尚のエピソードを紹介しよう。
「学者、盗人入るべからず　ー大中京璨ー
京璨は、大寺名刹に住持することを好まなかった。縁あって武蔵（埼玉県）大宮の東光寺の住職となったが、もっぱら枯淡な毎日を送っていた。俗人が訪ねて来ることを厭い、門にこう書いて貼っていた。

住持無学に付き、学者入るべからず
寺貧乏に付き、盗人入るべからず」

現代人には一見して「学者入るべからず」の貼紙は、「不許葷酒入山門」（くんしゅさんもんにいるをべからず）のパロディーに思えようが、論争後に大中京璨和尚を訪ね、商量を挑む学者の多数であった様子が窺える。
住持数年にして、武蔵（埼玉県）大宮よりも、更に草深い下総（千葉県）富里の昌福寺に入った理由のひとつは、或いは、その煩わしさであったろうか。
大中京璨和尚が昌福寺で、『油断大敵集』の草稿を見た時期は、1851（嘉永4）年12月である。
肉山（檀家が多く収入の多い寺）を嫌い、骨山（肉山の反対）を好んだ大中京璨和尚は、昌福寺に1871（明治04）年10月14日65才で寂した。

富里地域の寺子屋教育を担った人物の一人とされる大中京璨和尚（表では京璨退歩、※20・※21・※22）の、昌福寺住持期間、〝少なくとも1851（嘉永4）年12月より、1871（明治04）年10月まで〟、は『油断大敵集』跋文という新根拠により補強された。
従来知られていた『千葉県教育史』第一巻（※20・※23・※25）の、寺子屋表から関係する箇所を抜粋し並べれば、表01（table.01）の通りである。
大隆寺もまた、四街道山梨地域の公立学校設立以前に学校機能を有していたことが知られている（※23・※24）。
先に紹介した風光山福寿院（千葉市中央区）についても、川戸地域で寺子屋教育を実施していた（※25）。

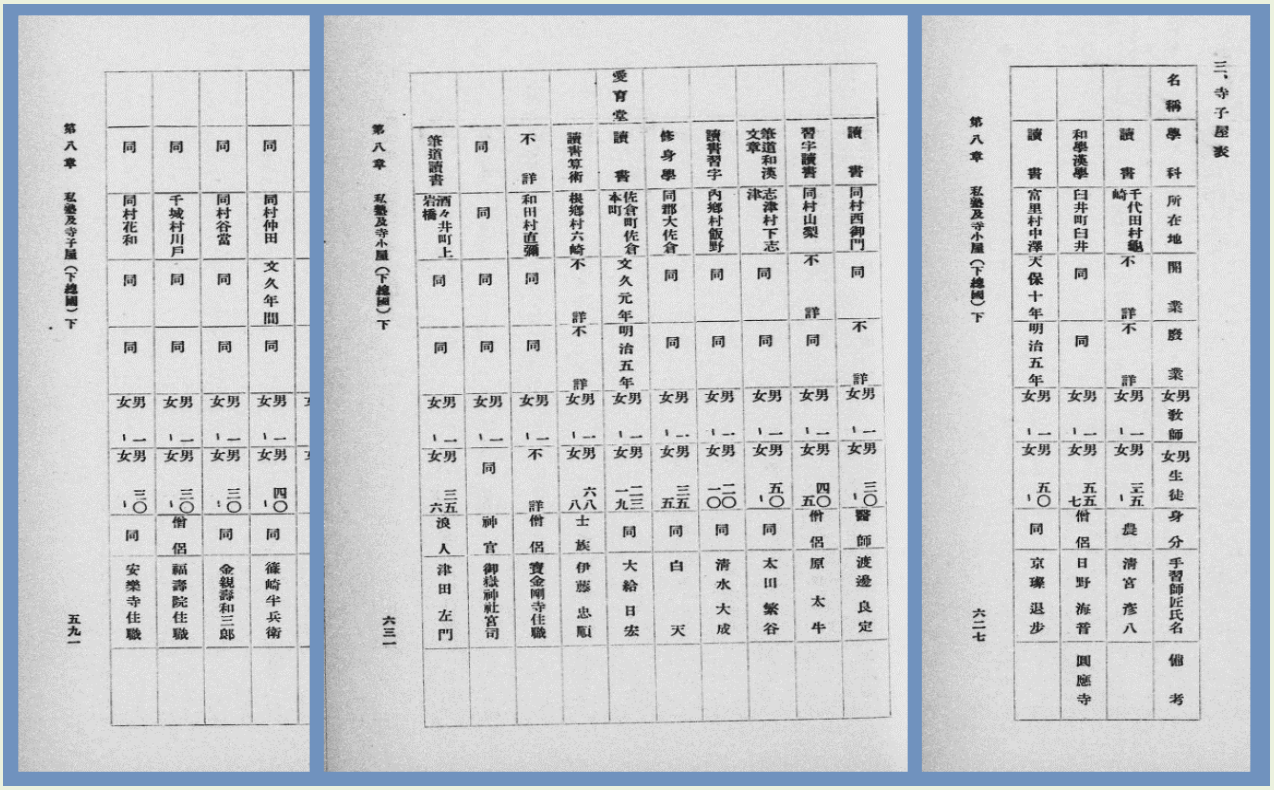

表01（table.01）　福寿院・大隆寺（原太牛）・昌福寺（京璨退歩）関係　寺子屋表

図07（fig.07）福寿院　全景

ただ、『千葉県教育史』では、大中京璨和尚が冨里村中澤で寺子屋を開いた年は、1839（天保10）年と

記載されている。
筆者は、大宮山東光寺由緒沿革（※16）中の剃髪式及び「原坦山と「印度哲学」の誕生」（※18）を根拠として、「論議」を1840（天保11）年と推定した（前述）が、『坦山和尚全集』には「論議」の明確な年月日は記述されていない。
仮に、『千葉県教育史』に従えば、大中京璨和尚は、1839（天保10）年から昌福寺住持でなければならぬ。
すると必然的に、大中京璨和尚が大宮山東光寺住持であった期間は、1839（天保10）年以前となる。
学僧（栴檀林寮司）として「論議」を実施した年月日もまた然り、1839（天保10）年より更に遡る可能性が高くなろう。
試みに、原坦山（新井良作）の昌平黌在学記録に迫るべく、手元にある『昌平黌勤皇譜』（※26）の「書生寮姓名簿」を見る。
影印版の同名簿には、書生の藩元・入寮年・退寮年月・氏名・年齢が明記されるからである。
すると、惜しいかな同名簿は、弘化丙午以来（1846・弘化3年）となっており、1834（天保5）年に15才で入学したとする説（※18）さえ、確認できなかった。
『千葉県教育史』による筆者の仮説が、将来、別の根拠によりクロスチェックされたなら、大中京璨和尚の昌福寺住持始期は、少なくとも1839（天保10）年となり、在任期間は1839～1871年の32年間と確定しよう。
天保年代の官製教育機関とみなせる藩校に関する佐倉地域の状況は『佐倉市史　巻二』（※27）に詳しい。
佐倉藩に、藩臣の子弟のための佐倉成徳書院が、1836（天保7）年10月に開校し（※27・873pp）、一部の者は、藩から手当てを支給され江戸・昌平黌等へ遊学した（※同・921-924pp）。
町家の子弟教育機会を提供した手習師匠についても、わずかな記述がある（※同・943-944pp）。
本稿では、近隣の雄・佐倉藩の佐倉成徳書院開校に遅れること僅か3年にして、富里・昌福寺に寺子屋を開設された大中京璨和尚を称えたい。

大中京璨和尚に関する資料に乏しい中、昌福寺の檀家である富里村中沢の鳴田芳太郎氏（1944（昭和19）年08月28日歿）が、昭和初期に書かれた郷土資料（手稿）を、後年村が活字化した『富里村郷土読本』（※28）から、大中京璨和尚に関する部分の全文を紹介しよう（同書第十四章人物、44-45pp）。

「中沢の昌福寺の住僧に京燦和尚というものがあつた。退歩と称し、越後の新潟に生まれ、幼にして僧となり、長じて江戸駒込柚檀林（ゆうだんりん）の寮長となつた。
此頃、儒仏の争い盛んにして、天下の儒者は多く江戸湯島の聖堂に集り、名僧智識は多く駒込の吉祥寺にあり、たまたま聖堂の儒者に原良作というものあり、京燦とはいつもその論争の相手であつた。
或る日二人相約した。京燦若し敗せばその首渡さん、良作負くればその弟子となると。
こゝにおいて二人互いに論難攻撃日を重ね、良作は遂に京燦のために説服せられ、その佩びたる両刀を投出し平伏してその弟子となり、直に剃髪して坦山と称したという。
京燦はその後発狂して諸方を流浪し、遂に中沢に来る。
時に昌福寺の住僧秀全なるものこれを厚遇し、病癒えてその後を継がしめた。
坦山また来て昌福寺に居た。こゝにおいて当時の名僧智識の来りて教を請うもの甚だ多かりしという。
京燦また書を能くし、殊に篆隷（さんれい）に妙を得、諸方より神社の幟（のぼり）の揮毫を請うもの甚だ多く、すり鉢に墨汁を充し、箒の如きみごわら筆を以て本堂の長縁において一気呵成にこれを書する。
実に美事なものであつたという。
明治四年昌福寺に没し、その墓は寺の東側骨堂山に在る。」

鳴田氏は、大中京璨和尚は新潟の生まれで、柚檀林（ゆうだんりん）の寮長になったとするが、既に述べてきたように、柚檀林は栴檀林の誤りであろう。
儒仏の論争の概要は、1909（明治42）年発行の『坦山和尚全集』からの引用と思われる。
「京燦はその後発狂して」については、今のところ他に資料が見当たらない。
「昌福寺の住僧秀全なるものこれを厚遇し、病癒えてその後を継がしめた。」については、「昌福寺二十世は大道秀全和尚と記録が残り、秀全和尚は他に転出したようだ」と二十七世萩野吉史和尚御母堂様に伺った。
従って、二十一世の大中京璨和尚と整合する。
「坦山また来て昌福寺に居た。」は、『坦山和尚全集』に記載がなく今のところ他に資料が見当たらない。
「こゝにおいて当時の名僧智識の来りて教を請うもの甚だ多かりしという。」は、さもありなんと思える。
「京燦また書を能くし（中略）美事なものであつたという。」は、鳴田氏の描く大中京璨和尚像のハイライトで、昌福寺二十四世住持からの聞き書きと推定され、よくぞ伝えて頂いたものと感謝したい。

大中京璨和尚の出生地は、『坦山和尚全集』に従えば、栴檀林の「越後寮の寮司」を務めた学僧という一事を以て、また、『富里村郷土読本』に従えば、「越後の新潟に生まれ」とあり、越後と考えられる。
そうであれば、越後国・中越出身の禅友、大隆寺十九世無能大珍和尚の『油断大敵集』に跋文を乞われた時、同郷のよしみ及び児童教育者の縁も重なり、嬉しく思われ快諾されたことと思慮する。

号の退歩は、日本における曹洞宗の開祖道元禅師の『普勧坐禅儀』の一節から採ったものと推定される。
『道元禅師語録』(※29)から該当箇所の白文及び読み下し文並びに訳文を挙げ参考としたい。

須学回光返照之退歩
須(すべから)く回光返照(えこうへんしょう)の退歩(たいほ)を学(まな)ぶべし
一歩自分に振り返って、自分を凝視(みつ)める内省(ないせい)をしなければならない

近年、昌福寺に大中京璨和尚の書が残されていることが判り、2015(平成27)年03月、富里市の指定文化財に「京璨退歩(きょうざんたいほ)の書」として指定された(※30)ことは、誠にご同慶の至りである。
最後に、寂後144年目に咲いた蓮華を手向け、本稿では一先ず「大中京璨和尚略伝」を閉じる。合掌。

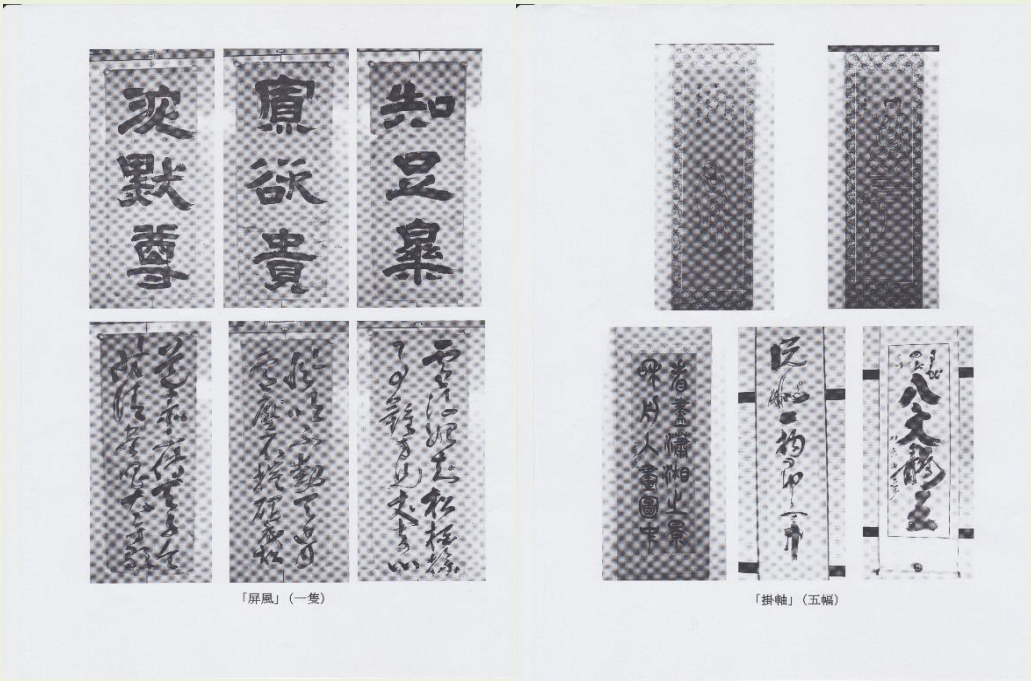

図08a(fig.08a)＆図08b(fig.08b)大中京璨の墨蹟(富里市教育委員会提供)

【0403】「開板施金列名」

『油断大敵集』の郷土資料的価値を高める白眉は、その巻末に掲載された「開板施金列名」(四十四丁の次丁跋文の次丁より三丁分・丁付けなし)にこそあると信じ、「開板施金列名」の全部を以下に掲載する。

「開板施金列名」
山梨村
梅沢久兵衛隠居
大塚惣左衛門
石橋清左郎
松井久左衛門
松井利右衛門
栗原治郎右衛門
大野長右衛門
此藤太右衛門
小川平兵衛
小川治郎兵衛
荻原七右衛門
梅沢那右衛門
平井清兵衛
石橋半左衛門
荻原治兵衛

物井村
桜井治郎兵衛
栗原新八母
栗原新八

鹿渡村
吉橋源左衛門

山梨村
大塚清左衛門
大野添三郎
中嶋亀蔵

物井村
小柴太郎左衛門
栗山治郎左衛門

野田村
市原重右衛門隠居

鹿渡村
小川三郎右衛門
吉橋清右衛門
海保長右衛門
海保庄左衛門
海保金兵衛
木村五郎右衛門

小名木村
山崎庄左衛門
高橋金兵衛
吉橋庄五郎
海保八郎右衛門
海保治兵衛
吉橋半三郎
吉橋郡蔵
山崎久五郎
大野甚之丞
山崎庄治郎

南波佐間村
中台七郎兵衛
中台紋左衛門
同紋左衛門隠居

中台村
粟飯原新五右衛門
古川喜平治
市原七郎右衛門

和田村
麻生平左衛門

南波佐間村
中台政治郎
永野惣兵衛
永野三郎兵衛

中台村
内田重郎治
市原長右衛門
相原幸八
篠原平兵衛

上埜村
粟飯原善右衛門
粟飯原兵左衛門

小篠塚村
牛玖添五兵衛
羽根井権四郎
牛玖平右衛門
牛玖市兵衛

成山村
白子清蔵

亀崎村
清宮彦兵衛
林田喜右衛門

小篠塚村
竹内佐五兵衛
嶋田藤右衛門
牛玖庄三郎
牛玖源右衛門
牛玖久三郎
大崎甚右衛門

長岡村
高橋勘左衛門
井岡治郎左衛門

如来寺村
永妻五郎兵衛

長岡村
井岡三郎兵衛
同三郎兵衛隠居
同治郎左衛門隠居
（巻末一丁表～三丁裏）

【謝辞】

四街道市文化財審議会委員・市史編さん協力員大矢敏夫氏に、くずし字の一部を御教示頂き、古文書
翻刻（活字化）の慣例等多岐にわたり助言を頂戴し、深く感謝します。
四街道市教育委員会社会教育課林田聡嗣氏に、「開板施金列名」の氏名校正を頂き、感謝します。
富里市教育委員会生涯学習課文化資源活用室長林田利之氏に、『富里村郷土読本』を紹介頂き、
また、大中京璨和尚様の墨蹟（縮小判写真）を提供頂き、感謝します。
昌福寺二十七世萩野吉史和尚御母堂様に、大中京璨和尚様のお話を伺い、感謝します。
福寿院田中義光和尚様に、寺史のお話を伺い、感謝します。

【参考文献（筆者架蔵書）】

（※01）千葉県内図書館横断検索　https://www.library.pref.chiba.lg.jp/
（※02）「無能大珍大和尚」『四街道町史　社寺史』栗原東洋
1979（昭和54）年12月01日　70-71pp　四街道町¥700.
（※03）『下総國蕾事考 』清宮秀堅 1905（明治38）年02月05日
和本全15巻8冊清宮利右衛門（千葉県香取郡佐原町） 発売所：正文堂（佐原町）千葉中学旧蔵本
（※04）「四街道市の中世編（2）二人の千葉勝胤について」樋口誠太郎
『四街道の歴史』第9号四街道市史編さん委員会編（平成26）年03月96pp四街道市教育委員会
（※05）『佐倉市史　巻一』佐倉市史編さん委員会編,

1979（昭和54）年11月03日,再版,212pp,佐倉市,¥3000.
（※06）『成田市史　中世・近世編』成田市史編さん委員会1986（昭和61）年03月896pp　成田市
（※07）『祖堂集』巻第八・花園大学国際禅学研究所・http://iriz.hanazono.ac.jp/pdf/st08/st08_08.pdf
（※08）臨済禅師・臨済録の一無位真人・『禅語百選』松原泰道
1985（昭和60）年08月01日初版第1刷　156-157pp　祥伝社　¥408+税
（※09）主人公・無位真人　『禅語散策』田上太秀
2007（平成19）年09月10日第1刷　34-39pp　学術文庫　講談社　¥800+税
（※10）『論語』の「陽貨」第十七　3・「子曰。唯上知與下愚不移。」
Web漢文大系・http://kanbun.info/keibu/rongo1703.html
（※11）『資治通鑑』「卷二十三　漢紀十五」・維基文庫，自由的圖書館・
https://zh.wikisource.org/wiki/%E8%B3%87%E6%B2%BB%E9%80%9A%E9%91%91/%E5%8D%B7023
（※12）修証一如・『道元辞典』菅沼　晃1977（昭和52）年11月30日初版　34-39pp　東京堂出版　¥2200
（※13）回天慧杲和尚・美術人名辞典・
http://www.weblio.jp/content/%E5%9B%9E%E5%A4%A9%E6%85%A7%E6%9D%B2
（※14a）物外不遷和尚・物外和尚逸伝12-13pp・http://www.soto-shu.com/saihouji/garelly/index.html
（※14b）物外不遷和尚・略年譜（済法寺）・http://www.soto-shu.com/saihouji/nenpyo.html
（※15）釋悟庵『坦山和尚全集』光融館（東京市）
1909（明治42）年11月13日初版　406pp　壱圓三十銭
国立国会図書館近代デジタルライブラリー・
http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/823362/7
（※16）大宮山東光寺由緒沿革・http://おおみや-東光寺.com/history.html
（※17）「東京大学インド哲学仏教学研究室の沿革」http://tgiw.info/indology/lab/enkaku.html
（※18）原坦山と「印度哲学」の誕生・木村清孝・
https://www.jstage.jst.go.jp/article/ibk1952/49/2/49_2_533/_pdf
（※19）「学者、盗人入るべからず　一大中京璨一」『心にとどく禅のはなし』禅文化研究所
2004（平成16）年11月01日第1版第1刷　44pp　¥1800+税
（※20）寺子屋表・冨里村中澤『千葉県教育史』第一巻、千葉県教育会
1936（昭和11）年03月30日　627pp　五圓
国立国会図書館近代デジタルライブラリー・
http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1446082/476?tocOpened=1
（※21）富里地域の寺子屋教育を担った人物の一人・『富里の教育』・
http://www.city.tomisato.lg.jp/cmsfiles/contents/0000007/7169/27-tomisato-5.pdf
（※22）富里地域の寺子屋教育を担った人物の一人・昌福寺二十七世萩野吉史和尚御母堂様のお話
（※23）寺子屋表・弥冨村山梨『千葉県教育史』第一巻、千葉県教育会
1936（昭和11）年03月30日　631pp　五圓
国立国会図書館近代デジタルライブラリー・
http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1446082/476?tocOpened=1
（※24）大隆寺の寺子屋教育・『四街道町史　通史編』栗原東洋
1975（昭和50）年03月10日　237-246pp　四街道町¥500.
（※25）寺子屋表・千城村川戸『千葉県教育史』第一巻、千葉県教育会
1936（昭和11）年03月30日　591pp　五圓
国立国会図書館近代デジタルライブラリー・
http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1446082/476?tocOpened=1
（※26）「書生寮姓名簿」『昌平黌勤皇譜』森銑三
1985（昭和60）年04月24日　67-180pp　森篤子　非売品
（※27）『佐倉市史　巻二』佐倉市史編さん委員会編,
1973（昭和48）年03月25日,初版,1509pp,佐倉市,¥2000.
（※28）『富里村郷土読本』富里村史編さん委員会編,
1975（昭和50）年11月,初版,富里村　（写・部分）
（※29）普勧坐禅儀・『道元禅師語録』鏡島元隆
2013（平成25）年08月29日第24刷　170-171pp　学術文庫　講談社　¥880+税
（※30）「京璨退歩の書」富里市指定有形文化財27・
http://www.city.tomisato.lg.jp/cmsfiles/contents/0000007/7169/27-tomisato-5.pdf

【注】

引用図書名近傍に、※印＋番号を付し、詳細は参考文献に示した。
引用文は原文のまま「　」内に記載した。
そのため、西暦＋（和暦）年号の本文表記と原文とは不統一の箇所がある。
また、原文のフリガナには濁点・拗音の未区別や混在箇所がある。

人名の「璨」は、引用原文中「燦」及び「粲」の箇所は原文のままとし、本稿本文では
『油断大敵集』跋文署名の「璨」を正とした。
引用文は都度、引用末尾に原本の丁合またはページ数を示した。
引用文中に誤記誤植の明らかな箇所は、(　)内に〇〇か、と筆者が補注した。
本稿は、都合により横書きとした。

発表：2016年07月20日（水）　四街道市社会教育委員よしさん

http://lake-champ.com/　　Copyright by yoshisan.

ブラウザの　赤×　で戻って下さい。